

ではなく、実戦によって鍛えられた臨床的マニュアルであることが浮かんでくる。すべての治療はきわめて個別の部分があり、その意味で一つとして同じ治療はない。さらに言えば、強迫性障害に対する認知行動療法による治療の基本は、実は強迫性障害を治すことではない。強迫性障害と共に生きることを可能にするこ

とである。
さて、なぜ強迫性障害は精神療法だけでは治りにくくなったのか。この冒頭の疑問に対する明確な答えは書評子として見いだせていないが、

木村 敏智、聞き手II今野哲男

『臨床哲学の知』

臨床としての精神病理学のために』

本書は、わが国を代表する精神科医のひとりとして、独自の現象学的人間学を構築し、臨床精神病理学の領域において揺るぎない地位を占めている著者が、聞き手を通してみずからの考えのエッセンスを一般読者にもわかりやすく述べた、語り下ろしの書である。

このマニュアルを読みながら、意識の構えあるいは意識の持ち方といったもの自体が、二〇年ぐらゐの単位で変容を重ねており、以前とは変容しているのかもしれないという感慨が浮かんでくる。優れたマニュアルは治療的な意識の構えを明確化してくれる、という感想は深読みかも知れない。

この本は強迫性障害に限らず、比較的難治の精神科疾患に認知行動療法を用いるときのさまざまなヒントをも与えてくれると思う。

杉山登志郎

て、とても親しみのもてる内容に当たっている。それを可能にした聞き手の労に、まずは感謝したいと思う。著者がこれまで論じてきた膨大な著作のエッセンスが、本書では聴き手との「あいだ」を通して、よりこなれたかたちで再現されている。

評者が本誌でこの著書を取り上げようと思つたのは、著者のいう統合失調症における「自己個別化の原理の危機」としての「自明性の喪失」を初めとする「あいだ」論について、今日の発達障害ブームの中で、その意義を改めて捉えなおしてみたいと考えたからである。以前、評者は広汎性発達障害の治療を通して発達論的に論じ、それが契機となつて著者らと対談をするという貴重な体験をもつたことがある（このころの臨床ア・ラ・カルト）二三巻三号、二四四―二五九頁、二〇〇四年。そのことを再度吟味してみたいとも思つたからである。

著者の膨大な著作全体を流れる鍵概念にはいくつがあるが、その代表的なもの、いうまでもなく著者の発想の起点となつた「あいだ」である。音楽演奏を通して体感した演奏

者同士の「あいだ」で立ち上がる現象、それは「共通感覚」の世界である。そこでの体験世界はまさに「アクトチュアリティ」の世界で時々刻々と変容していくために明確には捉え難い体験世界である。

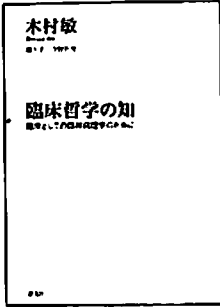
それに比して今日の科学の世界で重視されているのは「リアリティ」であつて、それはことばによつて規定される概念世界である。「リアリティ」と「アクトチュアリティ」の関係、まさに両者の「あいだ」にこそ「自己個別化の原理の危機」が内在しているという。

著者の著作では、必ず二つの対立項が提示され、その両者の「あいだ（関係性）」を論じるという思索の方法が一貫してとられている。具体的には、「もの」と「こと」、「体言」と「用言」、「実体」と「作用」、「主語的な自己」と「述語的な自己」、「アポロン」と「ディオニュソス」、「理性的日常」と「非日常、反日常」、「ノエシス」と「メタノエシス」、「ピオスな生命」と「ゾーエー的生命」、「小文字の生」と「大文字の生」、「小文字の死」と「大文字の死」などであるが、これま

で著者が取り上げてきたテーマの大半が本書でとてもわかりやすく語られている。これら対立項の思索の原点となっているのが、「リアリティ」と「アクチュアリティ」の関係なのである。

ただここで忘れてならないのは、対立する二項がまずあって両者の「あいだ」が生まれ、そのことを論じることが「あいだ」論ではないと著者が強調しているところである。評者の観点からみていくと、著者の主張の重要性が浮かび上がってくる。

その端的な例は「自己」と「他者」の生成過程にみとることができると思う。「あいだ」がなければ「自己」も「他者」もありえない。乳児あるいは幼児期早期の子どもたちと養育者との「あいだ」で何が生起しているかを考えればわかりやすい。



洋泉社、2008年
2310円 (税込)

われわれは子どもを育てる際に、彼らを前にして、この子はここをもちたい存在だとは思ってもいいだろう。子ども自身もここをもつ存在であると当然のごとく捉えて接している。乳児が泣けば、「ああ、おなかですいたのね」「ねむいのね」などと乳児の気持ちを感じ取り、まるで自分が乳児であるかのようにして応え（成り込み）、乳児が気持ちよくなるように世話を焼く。ここでは乳児自身は反省的自己をもたないために、自分の今の生理状態を「おなかですいている」とか「ねむい」などと頭では理解していない。身体で感じ取っているだけであろう（が、実はこのことがとても大切なのである）。

それに対して乳児との「あいだ」で養育者は（間主観的に）感じ取り、乳児の身になって応じている。このようなかわり合いの内幕にこそ、ここでの発達（あるいはそだち）の最大の特徴があるといっている。ここでの体験世界は自己融合的で、自他合一ともいえるものである。著者のいう「あいだ」がまずあって、その結果として二項が生まれ

るとはこういうことだろうと思う。

このようなかわり合いを重ねていくうちに、反省的自己が芽生え、自分の身体の変化に気づき、自分のことばで自己主張することが可能になっていくのである。このときの両者を繋いでいるのが、まさに著者のいう「共通感覚」である。そして、子どもの「自己」が立ち上がっていくためには、養育者自身もみずからの主体性をもったかわりが不可欠だということである。養育者が乳児のアクチュアルな体験世界をみずからの身体を通して感じ取ることが可能ならしめるためには、みずからを反省的にみることでできる主体性が欠かせないからである。

よって、乳児がみずから体験（体感）していることを適切に意味づけ認識することができると否か、その成否を握っているのは養育者を始めとしたかわる大人の存在のありようだということである。著者のことばを借りれば、「こと」としての体験を「もの」としてゆく過程である。

おなかですいている乳児のアクチュアルな体験そのものを、養育者が

アクチュアルに感じ取って対応することができれば、乳児の体験は養育者との「あいだ」でゆるぎない自己認識過程となっていくのであろうが、ことはさほど容易ではない。おそらくはさまざまな次元での取り違い、読み違い、すれ違いに出くわすのが日常の生活体験である。そのことが誕生後、日常的にあまりにも頻繁に起これば、それは乳児の反省的自己の生成（自己認識）に重大な齟齬をきたすことは容易に想像できる。そこにこそ「自己」の個別化の原理の危機」を見て取ることができるとは思えないかと評者には思われるのである。

著者が長年の精神科臨床においてもつとも大切にしてきたのが、患者に見られる症状に注目するのではなく、症状を背後から生み出している精神の病理、自己存在の病理に強い関心をもつという姿勢であったという。評者は著者のこうした臨床態度にいたく共感を覚える。なぜなら評者も常々子どもたちが示す症状、障碍、行動の異常などの背後に動いているもの、つまりはそこでの主体の

気持ちの動きに着目してきたからである。

「昨今、発達障害が急速に注目されるにつれ、子どもの精神医学の重要性が強調されるようになっていく。」

そこでは子どものころの臨床と銘打って臨床教育の計画まで立案されつつあるが、実際の医療現場を眺め回してみると、多くの場合、子どもたちが示している症状や行動異常、障害像などにのみ着目して、広汎性発達障害、軽度発達障害などの「発達障害」という診断名が濫用されている。

著者が昨今の精神医学の現状を、患者の内面を無視して外面的な症状だけを治療対象とする、寒々としたものになりさがっていると嘆き、将来を危惧しているが、このことは児童精神医学の領域においてもなんら変わらないのが実情である。その意味からも現在は著者の強調するように、(児童)精神医学そのものの存亡の危機である。

最後にぜひとも取り上げたいのは、著者の治療論についてである。これまで著者は精神障害の本質論をもつばら論じ、治療論についてはあ

まりにも寡黙であったからである。本書では著者の治療論の一端が、本音を交えてさりげなく語られている。

治すこと、治ることについては、が、症状を病気に対する生体の防衛反応だと考えれば、症状を出す必要がなくなれば、病気は自然に治っていくということが出来ます。そうすればもちろん症状も消えます。こちらが消そうとしなくとも、症状のほうでひとりで消えてくれるのが一番いいにきまっていますね。精神医学以外でも、仮にも自己回復傾向をもつたいいの病気は、放っておけば治ります。精神科の場合でも、それがかなりあると思います。

ただ、病気を放っておくといっても、医者がかわららずに放っておくということではなく、あくまで医者と患者の二人が共同して放っておくということなんです。医者のところに着て何かしら安心感みたいなものをもって帰るといふことを繰り返しているうちに、自然に治るのだと思います。統合失調症の場合、数は少ないですが、それでも治ってくれる人は

います。少ないけれど確実にいます。

そういう治り方が理想的で……(一九六―一九七頁)。

精神科の病気、とくに統合失調症は、自然治癒でしか治りようがないのではないかと思っています。医者が「治す」のではなく、勝手に「治る」ということです(二〇一頁)。

ここに著者の治療の基本的姿勢が端的に語られていると思うが、そのことを可能にしているのは何か。著者の多くの著作ではこれまで語られたことがないのではないかと思われる。次の語りの中にそれが示されている。

……わたしは昔から、赤ん坊を殺させる名人なのです。泣きわめいてどうにもならない赤ん坊をわたしはしばらく抱っこしていると、そのうちに寝てしまふ。……わたしには一種の動物磁気みたいなものがあるのだといわれたことがあります。例のメスメリズムでいわれた動物磁気ですね(一一〇頁)。

……わたしは赤ん坊を寝かせてい

るとき、大文字の(人生)の世界で赤ん坊とコミュニケーションをしているということだろうと思います(一二頁)。

深い哲学的思索を通して明らかにしてきた著者の仕事は、われわれ子どももそだちにかかわる者にとって決して遠くの世界のものではない。次世代を受け継いでいる罍者らに投げかけられた課題は、著者の主張を今日の子どものころの臨床を通して再吟味し、より具体的な治療論ないし予防論として再構築していくことではないかと思う。